

# イタリア本社が認めた日本専用モデル ラリーレーシングに 待望の16インチ追加



時は流れて2017年。往年の名作「ラリーレーシング」のリモデル版が登場する。ただし、サイズラインアップは17〜19インチ。装着車種が絞り込まれてしまう状況に、程なくして「15〜16インチの設定を!!」という声が日本国内で上がった。  
「そんなリクエストをイタリア本社に何度も打診しました。始めは取り合ってもらえなかったんですが、会う度に16インチも作ってよ!!とお願い続けていたところ、徐々に聞く耳を持ってくれるようになって。日本ではコンパクトカーでの需要が

あると認められ、やっとゴイサインが出たんです。3年くらいかかりましたけどね」と振り返るのはOZジャパン代表の内山さん。  
まず日本国内専用モデルとして発売されたラリーレーシング16だが、OZ製現行ホイールの中で唯一、独自の生産体制がとられる。かつて世界何カ国かに生産を委託していたOZレーシングは、5年ほど前からイタリア本社工場のみ



オーゼットジャパン代表 内山さん

で生産する方針に転換。つまり、イタリアで作られ日本に輸入されるのが本来の流れだが、ラリーレーシング16だけは例外的にエンケイの工場で生み出されるのだ。  
OZレーシングとエンケイの関係は1989年合併会社としてOZジャパンを設立したことに始まる。2001年に合併を解消し、OZジャパンはイタリア本社の直轄となるが、長い歴史を持つメーカー同士がお互いの技術力を認め合っているからこそ、今回エンケイでの生産が実現したと言っている。  
また、初代ラリーレーシングは走りを前面に押し出したスポーツホイールとして



ラリーレーシングと人気を二分するホイールがスーパーシリーズモ-WRC。こちらもWRCのターマック用ホイールをストリート向けにアレンジしたものだ。14インチから18インチまで全34サイズで、価格は3万3000円〜6万4900円(税込)。カラーはレースホワイトのみというのが深い。



グラベルではラリーレーシング、ターマックではクロノを履いて1993年シーズンのWRCを戦ったセリカGT-FOUR(ST185)。写真は第9戦1000湖ラリー(現ラリーフィンランド)で、トヨタチームはJ.カンクネンが優勝、D.オリオールが3位に入賞した。この年は快進撃を続け、5勝を挙げたJ.カンクネンがドライバーズチャンピオン、トヨタチームがマニファクチャラーチャンピオンに輝き、日本車初のWRCダブルタイトル獲得という快挙を成し遂げた。(PHOTO: SAN-EI)



WRCでダブルタイトルを獲得

幅広いユーザーに支持される名作ホイールのリモデル版  
オールドミニに履かせるラリー用ホイールの開発からスタートし、昨年、創立50周年を迎えたOZレーシング。モータースポーツに関わるホイールメーカーは国内外に数あるが、オンロード競技にもオフロード競技にも深く携わり、各カテゴリーで輝かしい戦績を残してきたメーカーはOZレーシングをおいて他にない。同時に、かつてはフットーラ、近年はスーパーシリーズモシリーズやウルトラレツジエーラなど、チューニングカーにマッチするアフターホイールでも人気を集めている。  
そんなOZレーシングの代表作としてラリーレーシングを挙げる人は多い。当時WRCマシンのグラベル用として開発され、ターマック用がクロノ、開口部面積を小さくしたドイツシユデザインは砂利の噛み込みを防ぐために採用されたという機能最優先のホイール。さらに、そのデザインは空力的にも優れていると認められ、DTMを戦うメルセデスベンツやアルファロメオにはセンターロックタイプが装着された実績も持つ。まさに、モータースポーツ直系の本格派だ。日本では1991年に発売され、ST165/185のWRCマシンに装着されたことも、OZラリーレーシング、というイメージを強く後押しすることになった。

## モータースポーツ直系の息吹

# OZ Racing

取材協力：オーゼットジャパン <https://www.ozracing.com/jp>

F1を頂点とするフォーミュラ、アメリカのCART、ツーリングカーレース、WRC...と、これまで幅広いカテゴリーにホイールを供給してきたイタリアの名門メーカー、OZレーシング。その日本ブランチであるOZジャパンがイタリア本社を口説き落とし、ようやく市販化にこぎ着けたのが、日本でリクエストが多かったラリーレーシングの16インチモデルだ。

PHOTO: 水川尚由/OZ JAPAN

受け入れられていたが、リモデル版16インチはターゲットユーザーを拡大。事実、軽自動車を含むドロップアウト派などからもすでに熱い視線が注がれている。  
内山さんいわく、「もちろん、指名買いてくれるスポーツ系ユーザーもたくさんいます。17〜19インチだと今、熱いのはGRヤリス。今回の16インチはスポーツ系だとロードスター、ヤリス/ヴェイツ、スイフトスポーツあたりにマッチすると思います」とのこと。  
メーカーワークスが錆を削ったWRC全盛期を知る者には懐かしく、当時を知らない世代には新しく感じられるリモデル版ラリーレーシング。

満を持しての16インチ登場には、もう歓喜しかない。

ラリーレーシング16のカラーバリエーションは3つ。レースホワイト、ダークグラフィ、グロスブラックだ。「スポーツ系ユーザーにはレースホワイトが人気。でも、それ以外のユーザーは落ち着いた色がいいということで、ダークグラフィを選ばれることが多いです」と内山さん。リム幅5〜7J、PCD98/100/108/112/114.3、4/5穴で、オフセットまで含めると全18サイズが揃う。価格は4万1800円〜5万2800円(税込)。